

## 舜の舌による瞽叟開眼故事の流布について\*

高井龍

### 序言

中國の傳說的皇帝の1人である舜は、殷代中期頃には山東省のあたりで信仰されていた農業の神とも言われる<sup>1</sup>。その後、堯・舜・禹として並び稱されるようになった彼は、その優れた統治のみならず、孝たることによっても廣く知られ、また讃えられてきた。そして、その孝子としての舜の姿は、敦煌文獻中の「舜子變文」と「孝子傳（擬）」にもまとまった記述が確認される。

その「舜子變文」や「孝子傳（擬）」には、舜が盲目となった父・瞽叟の眼を舌で舐め、瞽叟を開眼させるプロットがある。これは、舜に関する文章を残す『孟子』や『史記』等の古典籍には記載されておらず、以下の本論中にも見るように、傳世文獻における記録は決して多くはない。しかし、敦煌文獻中にはこのプロットが多数確認されている。本論は、従來の研究では具體的な考察対象となつてこなかつた舜の舌による瞽叟開眼に着目し、傳世文獻と敦煌文獻の記述を併せ用いることで、舜の孝子譚がいかに流布していたかを明らかにしようとするものである。なお、本論に言う「舜子變文」とは、S.4654V「舜子變」、P.2721V「舜子至孝變文」、羽39V「舜子變（擬）」の3點の寫本から復元される舜の故事を指している。他に、「舜子變」との擬題が冠される文獻として D<sub>x</sub>440a があるが、斷片であり、その内容も十分ではないため、ここでは取り上げない。

本論はまず、六朝時代以降の孝子と開眼故事との繋がり、及び孝子の舌による開眼故事を取り上げ、中國の長い歴史を有する孝子譚の中で、舜の舌の開眼故事が占める位置を考える。續いて舜の舌の故事が9、10世紀頃の敦煌文獻に多く見られることを踏まえ、ほぼ同時代の資料である宋初の『江西別録』に記載された舜の記事との比較から、當該故事の廣範な流布を明らかにしたい。またその『江

\*本稿執筆にあたり、2012年7月2日の發表時、諸先生方より多数の御教示を賜った。ここに、厚く謝意を表す。

<sup>1</sup>佐藤長「堯舜禹傳説の成立について」『中國古代史論考』、朋友書店、2000年、95-148頁。

西別録』の記事は、元末明初の知識人・陶宗儀（1329-1410）にも注目されていたことから、陶宗儀の文章を考察することで、後代における当該故事の位置付けが可能となるだろう。以上の考察から、歴代の舌による開眼故事を考えるにあたり、敦煌文獻中に舜の舌の開眼故事が多数確認されることの意義を考えてみたい。そして最後に、日本における当該故事の流布について、中國との差異やその傳播の特徴を明らかにする。

ここで、本論に入る前に、「舜子變文」の梗概を記しておこう。

「舜子變文」は、舜の實母・樂登夫人が、病のために夫・瞽叟に舜を託して他界する場面から始まる。瞽叟は後妻を娶ると、後妻は瞽叟を唆し、舜の弟の象とともに3度にわたって舜殺害を試みた。幸い、舜は帝釋天の助力も得ることで、それらの難を逃れたが、その後は實母の靈の勧めによって、1人歴山へ移り住むことになる。歴山で暮らすこと10年、豊かになった舜は、通りかかった商人に父母のことを尋ねたところ、瞽叟等が盲となり、また癡となって、貧しい生活を送っていることを知った。そこで彼は、米を賣りに町へ出て来る繼母に密かに援助し、孝を盡した。ある日、瞽叟はそれが舜であることに氣付き、涙を流してかつての行爲を謝す。その涙を流した瞽叟の眼を舜が舐めると、瞽叟の眼が開き、また繼母や象の病も治った。瞽叟は自分を唆した繼母を殺そうとするが、舜はそれを引き止める。舜の孝は天下に傳わり、彼は堯を繼いで皇帝となった。

この梗概からも分かるように、この故事の特徴は、舜の皇帝としての事跡ではなく、皇帝となる以前の孝行者としての事跡を主に置いていること、また、史書等には傳わってこなかったプロットが多分に盛り込まれていることにある。

## 一、孝子の舌と開眼が繋がる故事

### 六朝時代から唐代まで

現在、「舜子變文」と同じく舜の舌による瞽叟開眼の故事が確認できる典籍は、『法苑珠林』巻第49「感應緣・舜子有事父之感」を以て嚆矢とする。以下、その全文である。（開眼に関する文章を太字で示す。以下同じ。）

舜父有目失，始時微微。至後妻之言：舜有井穴之。舜父在家貧厄，邑市而居。舜父夜臥，夢見一鳳凰，自名爲雞，口銜米以哺己。言雞爲子孫，視之如鳳凰。黃帝《夢書》言之，此子孫當有貴者，舜占猶也。比年糴稻，穀中有錢，舜也。乃三日三夜，仰天自告過因。至是聽常與市者聲，

故二人舜前舐之，目霍然開見舜，感傷市人。大聖至孝，道所神明矣<sup>2</sup>。

『法苑珠林』の撰述は668年であり、7世紀後半にあたる。神としての舜の姿が殷代中期には形作られていたとも言われる以上、そこから優に1,000年以上の開きがあることになる。また、既に程毅中氏も指摘しているように<sup>3</sup>、この文章には若干の脱文があるようで、些か読みにくい。舜の舌による瞽叟開眼の故事がいつ頃形成されたかを推測することは、極めて困難と言わざるを得ない。

さて、『法苑珠林』の記載によれば、この文章は前漢・劉向撰『孝子傳』から引用されたものである。若干の脱文は傳承の過程で起こり得るものだが、ここで問題なのは、その脱文の問題以上に、劉向が『孝子傳』を撰したことについて、従来多くの識者から疑問が付されてきたことである。例えば、唐代に至るまでの經籍志に劉向撰『孝子傳』が確認できないこともその一因である。現存資料や先行研究の成果から判断するに、筆者もまた、劉向撰『孝子傳』とは、劉向に假託して作られた六朝時代の著作と見做すことが妥当と考える<sup>4</sup>。恐らくその假託は、彼が漢代で著名な學者であったというのみならず、『列女傳』の如き、孝と近い性格を有する著作を撰していたことも起因しているであろう。

次に、この劉向撰たる『孝子傳』が作成された六朝時代の孝子譚をみていくと、孝と開眼の結びつく故事が複数確認される。例えば祖台之『志怪』「盛冲」には次のようにある。

吳中書郎咸冲至孝，母王氏失明，冲鬻行，勅婢爲母作食。乃取蟻螯蟲蒸食之。王氏甚以爲美，不知是何物。兒還，王氏語曰：汝行後，婢進吾一食，甚甘美極，然非魚非肉。汝試問之。既而問婢，婢服實是蟻螯。冲抱母慟哭，母目霍然開明<sup>5</sup>。

このような孝子による開眼故事は、既に六朝時代に複数見られたことが、『晉中興書』「顔含」や『宋躬孝子傳』「陳遺」からも確かめられる<sup>6</sup>。だが残念ながら、「舜子變文」と同じ、孝子の舌による開眼故事は、現存資料にはあまり見られない。

<sup>2</sup>唐釋道世撰、周叔迦・蘇晉仁校注、『法苑珠林校注』、中華書局、2003年、1487頁。

<sup>3</sup>程毅中「《舜子變》與舜子故事的演化」『慶祝潘石禪先生九秩華誕敦煌學特刊』、文津出版社、1996年、89-99頁。

<sup>4</sup>近年の『孝子傳』の研究においても劉向撰『孝子傳』を六朝時代の著作と見做す立場は支持されている。参照：宇野瑞木「郭巨説話の母子像——二十四孝と十種恩徳」『中國——社會と文化』第22號、2007年、106-130頁。

<sup>5</sup>注2、1489-1490頁。

<sup>6</sup>この指摘は早くは次の論文に見られる。西野貞治「陽明本孝子傳の性格竝に清家本との關係について」『人文研究』第7巻第6號、1956年、22-48頁。

そこで少し角度を変えて、舌と開眼が何らかの繋がりを持つ類型故事を探してみると、史書や佛教經典にも近い故事が確認される。ここでは『南齊書』巻55と『大方便佛報恩經』（以下、『報恩經』）巻第4に見られる2つの故事を取り上げる。まず『南齊書』の故事は以下の通りである。

又永興概中里王氏女，年五歲，得毒病，兩目皆盲。性至孝，年二十，父母死，臨屍一叫，眼皆血出，**小妹娥舐其血，左目即開，時人稱爲孝感。**縣令何曇秀不以聞<sup>7</sup>。

これは、王氏のむすめが孝行者であったため、盲であったその眼が開いたという故事である。この故事は当時広く知られていたようで、『晉書』にも記載されていたことが、『太平御覽』巻第415「人事部56」に確認できる<sup>8</sup>。このプロットは、孝子自身が開眼するというものであり、また片眼が開いたという点でも、『法苑珠林』や敦煌文獻の舜の故事とは若干異なる。だが、そのような差異がありながらも、六朝時代の孝子譚の1つに、悲しみで血の涙を流したむすめの眼がその孝たることによって開いたという故事があったこと、そしてそれが史書にも採られているという事実に変わりはない。また、血を舐められたことによる開眼とは、その状況を思い浮かべるならば、舌で眼を舐めて開眼させたという舜の故事と極めて近いプロットと言えるだろう。

舌と開眼が繋がるもう1つの例は、『報恩經』巻第4「惡友品」である。『報恩經』は、その成立について今なお不明な点を残す經典であるのだが、唐代以前には成立していたとする点で、識者の見解は一致している<sup>9</sup>。またその内容は、恩について説く經典となっており、孝とも関係が深い。

この『報恩經』巻第4「惡友品」に、舌と眼の繋がる場面が見られる。その場面までの梗概は次の通りである。

昔、善友太子と惡友太子という兄弟がいた。善友は、一切衆生の濟度のために大海へ出航し、摩尼寶珠を手に入れる。その歸途、途中で別れた弟の惡友と再會したため、善友は摩尼寶珠の入手を告げると、惡友の心に強い嫉妬心が湧いた。そこで惡友は、疲れた善友が木陰で休んでいる時を狙い、2つの竹で眠っている善友の兩眼を突き刺し、摩尼寶珠を篡奪する。盲目となった善友は、そのまま當ても

<sup>7</sup>『南齊書』（中華書局點校本）、959頁。

<sup>8</sup>ただし、ここにいう『晉書』が歴代のいずれの『晉書』であるかは不明である。

<sup>9</sup>小野玄妙氏は4世紀末から5世紀初頭の成書とし（『佛教の美術と歴史』、大藏出版、1937年、12-27頁）、内藤龍雄氏は5世紀の中頃から後半の成書とし（「大方便佛報恩經について」『印度學佛教學研究』第3巻第2號、1955年、313-315頁）、Sumet Supalaset氏は北朝秦代から6世紀初頭の間の成書とする（『大方便佛報恩經』の成立問題『印度學佛教學研究』第57巻第2號、2009年、979-976（164-167）頁）。

無く彷徨い徘徊していると、利師跋王國において牛を放牧していた者が傍を通りかかる。その時に、視力回復のきっかけとなる出来事が起こる。

爾時善友太子坐在道中。爾時牛群垂逼踐踏，中有牛王，即以四足騎太子上，令諸牛群皆悉過盡，然後移足右旋宛轉，反顧迴頭，吐舌舐太子兩目，拔出竹刺<sup>10</sup>。

この「悪友品」における牛の舌は、直接に開眼の力を有しているわけではなく、後の開眼へと繋がる刺抜き役割を果たしたものである。その點、舜の故事や上掲『南齊書』等の開眼故事とは少しく異なるのだが、舌と眼の回復が關わる點では些か似た性格を持つ故事と言える。

ここまで、唐代までの資料に見られる孝子による開眼故事を取り上げて見てきた。その結果、舜の故事のような、孝子の舌によって盲であった人物が開眼するプロットは見られなかったが、それに類した開眼故事は複数存在していたこと、僅かながら史書にも採用されていたことが指摘できる。そして、現在確認できる中においては、舜の故事は、孝子による開眼故事の初期に位置づけられることも分かる。また、唐代以前において、孝子による開眼故事が様々なパターンを有して存在していたことから、『法苑珠林』や敦煌文獻中の舜の故事が、數ある孝子による開眼故事の1つであったことになるのである。

## 宋代以降

そして、宋代以降もまた、孝子による開眼故事の流布が途絶えることはなかった。だが、宋代以降の開眼故事が唐代までのそれらと大きく異なるのは、舜の故事と同じ舌による開眼故事が散見されることである。それは、例えば史書の如き公的な典籍にも確認される。以下、史書の例を3つ挙げる。

劉孝忠，并州太原人。母病經三年，孝忠割股肉、斷左乳以食母；母病心痛劇，孝忠然火掌中，代母受痛。母尋愈。後數歲母死，孝忠傭爲富家奴，得錢以葬。富家知其孝行，養爲己子。後養父兩目失明，孝忠爲舐之，經七日復能視。以親故，事佛謹，嘗於像前割雙股肉，注油創中，然燈一晝夜。劉鈞聞而召見，給以衣服、錢帛、銀鞍勒馬，署宣陵副使。開寶二年，太祖親征太原，召見慰諭。（『宋史』卷456「孝義」劉孝忠<sup>11</sup>）  
劉政，洺州人。性篤孝，母老喪明，政每以舌舐母目，逾旬母能視物。母

<sup>10</sup> 『大正藏』第3卷、145頁b。

<sup>11</sup> 『宋史』（中華書局點校本）、13387頁。

疾，晝夜侍側，衣不解帶，剖股肉啖之者再三。母死，負土起墳，鄉隣欲佐其勞，政謝之。葬之日，飛鳥哀鳴，翔集丘木間。廬於墓側者三年。防禦使以聞，除太子掌飲丞。（『金史』卷127「孝友」劉政<sup>12</sup>）

王思聰，延安安塞人。素力田，農隙則教諸生，得束脩以養親。母喪，盡哀。父繼娶楊氏，事之如所生。以家多幼稚，侵父食，別築室曰養老堂奉之，朝夕定省，愈久不怠。父嘗病劇，思聰憂甚，拜祈于天，額膝皆成瘡，得神泉飲之，愈。後復失明，思聰舐之，即能視。縣上狀，命表異之。（『元史』卷197「孝友一」王思聰<sup>13</sup>）

まず、最初の『宋史』劉孝忠の故事は、佛教との関わりが明瞭に読みとれる孝子譚である。よく知られているように、佛教は儒教や道教との論戦の中で、決して孝に背く教えではないことを強く主張し続けてきた。このことは梁・僧祐撰『弘明集』<sup>14</sup>に収められた幾つもの文章から確かめられる。そして、先に見た『法苑珠林』「感應緣」には、舜の他にも郭巨や董永等の有名な孝子が列挙されているが、これもまた、佛教を儒教社會に普及させるために佛教徒の計らいが反映されたものとは既に指摘されてきたことでもある<sup>15</sup>。この劉孝忠の故事もまた、それらの流れを汲んだ一例と見て間違いあるまい。更に、この最後の文章より、これが10世紀後半の出来事であったことが分かる（“開寶二年”は969年である）。P.2721V「舜子至孝變文」に“天福十五年”（950年）の識語が確認されることから、劉孝忠の故事は、舜の舌による開眼故事が流布していたのと同時代のことと分かる。

また、これら3つの故事からも見て取れるように、孝は立身出世と結びつくことが多い。これは、中國の歴代王朝が、その統治のために孝子を宣揚してきたことが反映されているだけでなく、舜が孝たることを顯彰されて皇帝になったことにも繋がるものと言えよう。

ところで宋代以降では、これら史書のような政治的な意味合いを直接には有していない俗文學資料にも、孝子の舌による開眼故事が確認される。

『西遊記』卷9回「陳光蕊赴任逢災 江流僧復讎報本」には、玄奘が盲目となった母親の眼を舐めて開かせる場面がある。この母親は、夫と玄奘の歸還を待つ中で、十分な庇護がないために路上暮らしとなり、更にその悲しみによって視力を失ったのであった。しかし、その後再會した玄奘は、その母親の眼を舐めて開眼させる。以下、その場面である。

<sup>12</sup> 『金史』（中華書局點校本）、2747頁。

<sup>13</sup> 『元史』（中華書局點校本）、4450-4451頁。

<sup>14</sup> 『大正藏』第52卷。

<sup>15</sup> 道端良秀『佛教と儒教倫理——中國佛教における孝の問題』（サーラ叢書17）、平樂寺書店、1968年、265頁。

玄奘問：「婆婆的眼，如何都昏了？」婆婆道：「我因思量你父親，終日懸望，不見他來，因此上哭得兩眼都昏了。」玄奘便跪倒向天禱告道：「念玄奘一十八歲，父母之仇不能報復。今日領母命來尋婆婆，天若憐鑑弟子誠意，保我婆婆雙眼復明！」祝罷，就將舌尖與婆婆舔眼。須臾之間，雙眼舔開，仍復如初<sup>16</sup>。

『西遊記』の成立には今なお不明な點が残されている。だが、明・吳承恩の編纂によってまとめられたとする近時の説に基づけば、遅くとも明代には一定の形を成していたと考えられる。もっとも、明代の成立とするのは下限の年代測定である。『西遊記』中の唐太宗入冥故事が、10世紀初頭に書寫されたと思しい敦煌文獻 S.2630「唐太宗入冥記」<sup>17</sup>にまで遡ること、また唐・張鷟撰『朝野僉載』にも『西遊記』との關連が認められることを踏まえるならば<sup>18</sup>、玄奘が母を開眼させる場面も、宋代頃に既に一定の形成を見ていた可能性は充分にあるだろう。

このように、宋代以降の史書や俗文學の内容からは、舜の舌による開眼故事と同じプロットが多數確認されていく。これは、唐代までの孝子による開眼故事の流布のあり方と大きく様相を異にしたものである。

それでは何故、宋代以降の資料からそれらの故事が見られるようになるのか。宋代の始まる10世紀、並びにそれより少し前の9世紀頃に、舌による開眼故事の流布に關わる何らかの要因があったのであろうか。ここで想起されるのが、敦煌文獻中の舜の故事が9、10世紀を中心としていることである。果たして舜の故事が、孝子の舌による開眼故事が流布する要因の1つとなったと考えられるのだろうか。次章ではこの問題を考えるため、舜の舌による瞽叟開眼故事の流布について見ていきたい。

<sup>16</sup> 吳承恩撰、世界書局編輯部編校『西遊記』、世界書局、1967年。

<sup>17</sup> 當該寫本には「天復六年」の識語が確認される。ただしこの年代について、黃征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局、1997年）は、正しくは天祐三年（906年）のことであろうと指摘している。（該書332頁の注161参照。）その一方で、帝王への敬意を示す空格が寫本上に確認されることから、唐太宗（在位：627-649）の時代からそれ程遠くない時代の寫本である可能性も指摘されている。金岡照光『敦煌の繪物語』、東方書店、1981年、192-193頁。

<sup>18</sup> 「唐太宗入冥記」と『朝野僉載』や『西遊記』との關係は、狩野直喜「支那俗文學史研究の材料（上）」（『藝文』第7年第1號、1916年、104-109頁。）以來、多數の指摘がある。参照：『隋唐嘉話・朝野僉載』（唐宋史料筆記叢刊）、中華書局、1979年。

## 二、10世紀における舜の舌の故事の流布

### 舜の舌の故事を詠んだ詩の流布

舜の舌による瞽叟開眼のプロットは、複数の敦煌文獻に確認される。その中でも以下に掲げる詩は、P.2721V「舜子至孝變文」や羽39V「舜子變（擬）」などの「舜子變文」のみならず、S.389V「孝子傳（擬）」やP.3536V「孝子傳（擬）」、更には舜の故事とは本来直接の関わりがないはずのS.2204「董永變文（擬）」にも引かれており、敦煌において広く流布していたことが見て取れる。

瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。將米糞都逢父母，以舌舐眼再還明<sup>19</sup>。

この詩に言及する研究は少なくないが、ここでは高橋稔氏の指摘を振り返っておきたい<sup>20</sup>。

高橋氏の研究は、『孝子傳』研究の立場から、瞽叟の盲目が民衆によっていかに認知されていたかを指摘し、併せて舌による開眼について言及したものである。氏は、S.389VやP.3536Vの「孝子傳（擬）」に記された舜の故事と上掲の詩とを比較し、故事においては盲目となったと語られていないのに、詩では盲目になったことがはっきりと詠まれていることに着目する。また、上掲の詩も、預備知識を持たない者がそれを讀んだ場合、何故瞽叟が“填井”によって盲となったのか、第1句目の意味するところがまず理解できないことを指摘する。このことから、“填井”による盲目を含む詩の内容が、既に多くの人の熟知するところであったと述べる<sup>21</sup>。

このことはまた、舜が瞽叟を開眼させたのは、詩にあるように、舌で舐める行為によるとの認識が共有されていたことを示してもいよう。

ここで筆者が舌で舐める開眼方法に着目するのは、敦煌文獻P.2621に、舜が瞽叟を開眼させる方法が舌ではなく、手で涙を拭うと記されているためである。更に、日本残存の古文獻に見られる舜の故事も、開眼方法は舌ではない。日本の古文獻の問題は後述するが、少なくとも敦煌文獻から考えるに、本来瞽叟の開眼は舌によるプロットが基本となっていたことが分かる。

<sup>19</sup> ここには寫本ごとの文字の異同や誤寫は反映させていない。

<sup>20</sup> 高橋稔「敦煌出土「孝子傳」零本について」『中哲文學會報』第10號、1985年、141-150頁。

<sup>21</sup> 高橋氏は併せて次のように指摘している。「この作品を広く多くの人々に聴かせる、あるいは讀ませることを意識して作られたものと見る場合、相手が已に舜の話の筋は熟知しているということを前提に語り起されているという感じがする。つまり、この作品は、その末尾の詩をも含めて、すでに舜の話の筋を熟知している人々に對して語られた、あるいは見せられたものらしいということである。」上掲論文146頁。



それでは舜の舌と瞽叟の開眼が繋がる故事は、敦煌以外の地域ではどこまで流布していたのだろうか。果たして宋代以降の同系故事の流布への影響を想定することはできるのだろうか。

### 『江南別録』に見る舜の舌の故事の流布

かつて金岡照光氏が待考とした舜の舌による開眼故事の流布を考えるにあたり<sup>22</sup>、僅かながら、参考となる記述が確認された。それが、宋初・陳彭年（961-1017）が撰した『江南別録』である。ここではその記述に基づきながら、当該故事の流布について考えてみたい。その文章は以下の通りである。

彭李者，世爲義門陳氏之傭夫，喪明已久。有子一人，常聞陳之子弟言，舜王孝而父瞽叟，舐目而致明，乃歸倣之。不旬日，父目忽然明朗<sup>23</sup>。

『江南別録』は、南唐（937-975）の義祖、烈祖、元宗、後主という4代の皇帝に関する記述から成り、同じ時代の湯悦・徐鉉等が撰した『江南録』に漏れた記事を、陳彭年が収集したものである<sup>24</sup>。

まず、彭李の子が舜の舌による開眼の故事を聞いたのは、彼の仕えている義門陳氏の子弟が常に舜の話をしてきたことによる。義門陳氏と言えば、累世同居たる義門の先驅けとなった一族であり、唐末期より大きな力を持ち始めた一族である<sup>25</sup>。『宋史』によれば、黄巢の亂を避けるため、陳伯宣が徳安に居を遷して後、子の陳崇が江州長史となった。陳氏は唐・僖宗（在位873-888年）の時代に表され、南唐において義門を立てたとされる<sup>26</sup>。

そして、この『江南別録』を撰した陳彭年が義門陳氏と同姓であることから、兩者の間に何らかの関係があったことは想像に難くない。このことは、陳彭年の傳（『宋史』卷287）の次の文章からも確かめられる。

<sup>22</sup>金岡照光「敦煌本舜子變再論補正——附斯坦因4654本校勘譯註」『東洋大學紀要・文學部篇』第26集、1972年、41-67頁。（後、同『敦煌文獻と中國文學』（五曜書房、2000年）に轉載。）

<sup>23</sup>陳彭年撰『江南別録』（朱易安等主編『全宋筆記』第1編第4冊）、大象出版社、2003年、195-210頁。

<sup>24</sup>「此書所紀爲南唐義祖、烈祖、元宗、後主四代事實。時湯悦、徐鉉等奉詔撰《江南録》。彭年是編，蓋私相纂述，以補所未備故以別録爲名。《宋史》藝文志、晁公武《讀書志》俱作四卷，當以一代爲一卷。此本一卷，疑後人所合併也。」『武英殿本四庫全書總目提要』第2冊：史部、臺灣商務印書館、1983年、430頁。

<sup>25</sup>義門陳氏については次の論文に負う。佐藤仁「江州陳氏」について『東洋古典學研究』第17集、2004年、35-66頁。

<sup>26</sup>「灌孫伯宣，避難泉州，與馬總善，注司馬遷《史記》行於世；後遊廬山，因居徳安，嘗以著作佐郎召，不起，大順初卒。伯宣子崇爲江州長史，益置田園，爲家法戒子孫，擇羣從掌其事，建書堂教誨之。僖宗時嘗詔旌其門，南唐又爲立義門，免其徭役。」（『宋史』卷456「孝義」陳兢）

彭年、幼好學、母惟一子、愛之、禁其夜讀書。彭年篝燈密室、不令母知。年十三、著《皇綱論》萬餘言、爲江左名輩所賞<sup>27</sup>。

ここにいう江左の名輩とは、江南に居を遷した義門陳氏の一族であろう。そして、江左の名輩が義門陳氏であることは、『江南別録』の舜の話の信憑性とも関わってくる。義門陳氏と近い関係にもあった以上、陳彭年は、この話を単なる傳聞以上に確かな話として耳にしていたことになるからである。

それでは、當該故事の流布は、どの程度のものであったのだろうか。敦煌と江南という兩地域に着目すると、次のことが分かる。

まず、敦煌が北方であり、江西が南方であるという地理的な問題からしても、両者が何らかの影響を直接に與え合う地域と考えることは難しい。特に9世紀の敦煌は、前半期は吐蕃支配期として中原との関係さえ希薄であったのであり、その後半期における張氏歸義軍時代も間もなく弱體化していった。続く10世紀初頭には、まず張奉承による金山國の獨立があり<sup>28</sup>、その後の曹氏歸義軍時代も半ば獨立状態にあったのである。一方の江西地域も、當時は唐王朝滅亡後の混亂の最中であつた。

このような状況においては、兩地域は地理的にだけでなく、政治的にも疎遠だったことは容易に想像がつく。このように疎遠な2つの地域に同様のプロットを持つ舜の故事の流布が確認されることから考えると、10世紀の中國においては、舜が舌によって瞽叟を開眼させた故事が極めて廣範に流布していたことが分かる。唐代以前の資料では、現在では『法苑珠林』にのみ見られる當該故事が、文獻には明瞭には表れない民間の世界において、極めて廣く流布した故事であつたのである。

そして、當該故事の廣範な流布には大きく2つの要因が考えられる。

1つ目は、舜の開眼故事が、もともとかなり傳播しやすい故事であつたことである。儒教の理念である孝について語る際、舜は第一に名前の擧げられる人物である。だが、そのような儒教的意味合いを含みながらも、儒教に限られることのない、もっと多様な姿を取り入れる民間傳承にまで、當該故事が傳播していたと考えられる。この點に関しては、先の金岡氏の論文をはじめとし<sup>29</sup>、幾多の「舜子變文」研究が指摘してきたことでもあるが、近年の調査においてもまた、「舜子變文」と似たプロットを有する舜の故事が今なお廣西省に残されていることが確かめら

<sup>27</sup> 『宋史』（中華書局點校本）、9661頁。

<sup>28</sup> 金山國が獨立した年代については諸説あるが、ここでは次の著書によつた。顏廷亮『敦煌西漢金山國文學考述』、甘肅人民出版社、2009年。

<sup>29</sup> 注22。

れている<sup>30</sup>。そして、ここでは舜の孝の対象は瞽叟ではなく繼母となっている。舜が繼母に孝を盡くすプロットは、『法苑珠林』が瞽叟への孝を強調していることと比べても、より「舜子變文」に近い。一般に、民間に流布する故事の内容は時代とともに容易に変化していくものである。そうでありながら、今から1,000年以上前の「舜子變文」と極めて近いプロットを持つ舜の故事が現代の廣西省に確認されることは、当該故事の極めて廣範な傳播があったことを示している。このような廣範な傳播が、10世紀において敦煌と江西という離れた地域にまで同じプロット of 舜の故事が流布した一要因となったと考えられるのである。

そして、もう1つ考えられる当該故事の流布の要因は、『法苑殊林』にある。舜の舌の故事を記した『法苑殊林』は、唐代の長安・西明寺にいた釋道世(?- 683)の編纂に成る佛教類書である。『法苑殊林』に記載された当該故事が、長安を起點として、周邊地域へ流布していったことが考えられるのではないか。

なお、『法苑殊林』の流布については、その書名が唐・道宣撰『大唐内典錄』には見られるのに、その後に編纂された唐・智昇撰『開元釋經錄』には見られないことなど、些か不明な點もある。だが唐代は、『開元釋經錄』が編纂された後もしばらくの間は『大唐内典錄』によって各寺の入藏經が選ばれていた<sup>31</sup>。このことは、中國の各寺が『法苑殊林』を藏經中に備えるべき典籍と見做していたことを意味する。それがどこまで実際に行われたか、また『法苑殊林』の抄出本としての流布の程度についても別に考察を要するとはいえ、少なくとも、9、10世紀頃に書寫されたと思しい敦煌文獻S.5915には、『法苑殊林』の4文字が確認されている<sup>32</sup>。更に、その『法苑殊林』という書名を記した文字が拙劣であることから、『法苑殊林』が初學者のような者にも傳わった典籍であることも窺われる。

<sup>30</sup>金文京「敦煌本「舜子至孝變文」と廣西壯族師公戲「舜兒」」『言語文化研究所紀要』第26號、1994年、71-92頁。金氏はこの論文の中で、「廣西貴港市東龍鎮同閉村演出隊爲廣西儺戲國際學術討論會演出曲（劇）目安排及內容簡介」の「舜兒」の概略を翻譯紹介している。その概略によれば、「舜兒」は、本文に述べるように「舜子變文」と近い内容を備える一方、一般的な古典籍が強調してきた舜の孝や瞽叟と繼母がいかにか救われたかについては、それ程重點が置かれていないようであり、些か相違も窺われる。なお金氏は、「舜兒」の中に、「舜子變文」に見られる近親相姦のプロットがなくなっていることに着目し、それが表だって記録することができなかつたためであること、またその由來が極めて古い可能性も併せて指摘している。

<sup>31</sup>牧田諦亮「中國佛教における疑經研究序説——敦煌出土疑經類をめぐって」『東方學報』第35冊、1964年、337-396頁。なお、中國の各寺が『開元釋經錄』を藏經の基準としたのは、その撰述から100年以上を経た後であり、會昌の廢佛以降のこととされる。方廣錫『中國寫本大藏經研究』、上海古籍出版社、2006年。

<sup>32</sup>S.5915については次の論文に負う。本井牧子「敦煌寫本中の『法苑珠林』と『諸經要集』」『敦煌寫本研究年報』第6號、2012年、81-98頁。

もう1つ『法苑珠林』の流布を示しているのは、10世紀の日本において源爲憲(?-1011)が撰した『三寶繪』に、『法苑珠林』が強い影響を與えていた事実である<sup>33</sup>。中國國外の典籍の成立に大きな影響を與えた事実から考えても、中國國內における『法苑珠林』の一定の流布を想定することは可能である。逆に、『法苑珠林』が中國國內においてさえ流布し難い典籍であったならば、日本に將來されることには大きな困難を伴ったであらうし、更にそのようにして將來された典籍が日本の典籍に大きな影響を與えるという事象が併せ起こる確率の低さは、『三寶繪』の成立を考えるのにもやや困難を伴うことになる<sup>34</sup>。

ただ、ここで重要なのは、『法苑珠林』が7世紀後半の典籍であり、唐代の主要經録が8世紀までの著述であるのに對し、その流布の想定されるのが概ね10世紀頃の中國であることだ。この數世紀の間に『法苑珠林』のどのような流布の變化があったかは今明らかにし難いが、舜の舌による開眼故事は、10世紀頃には全国的に流布していたことが認められるのであり、『法苑珠林』の流布もまた、その時期に一定程度の流布が認められる。婉曲的ではあるが、このことは、敦煌文獻中の佛教故事の略出寫本の幾點かが現在『法苑珠林』と比定されていることにも若干の支持ともなる。

まとめると、舜の舌の開眼故事は、それ自身かなり廣く傳播する故事であったこと、併せて『法苑珠林』のような佛教類書に採録されたことによって、廣く中國社會に認知されていったと考えられるのである。

10世紀の『江南別録』の記事が簡潔であるため、十分な情報を引き出すことの難しい面があることは否めない。ただ、そのような中からも、『法苑珠林』や敦煌文獻に確認される舜の舌の故事が、「舜子變文」の書寫年代と近い10世紀頃の中國において廣く流布していたことが見て取れる。ここに、宋代以降、舌による開眼故事が増加していったことの一要因を認めることができるのではないか。また、本章の考察により、かつて金岡氏の提起した問題に對しても、1つの解答を提示できたであろう。

なお、ここで『江南別録』中の陳氏の子弟について付言しておく、陳氏は同族教化や官界進出のために書堂を置いていたとされる<sup>35</sup>。この點から、陳氏の子弟

<sup>33</sup> 森正人「三寶繪の成立と法苑珠林」『愛知縣立大學文學部論集（國文學科編）』第26號、1976年、15-28頁。参照：小島孝之・小林眞由美・小峯和明編『三寶繪を読む』、吉川弘文館、2008年。

<sup>34</sup> 時代は少し下るが、平安時代後期（1094年）の佛教典籍目録である永超編『東域傳燈目録』の「雜述録四」に、「法蒙（苑）珠林百卷」とある。高山寺典籍文書綜合調査團編『高山寺本東域傳燈目録』（高山寺資料叢書：第19冊）、東京大學出版、1999年、135、236、373頁。

<sup>35</sup> 佐竹靖彦「唐宋變革期における江南東西路の土地所有と土地政策——義門の成長を手がかりに」『東洋史研究』第31卷第4號、1973年、51-84頁。（後、同『唐宋變革の地域的研究』（東洋史研究叢刊44、同朋舎出版、1990年）に轉載。）許懷林「財産共有制家族的形成與演變——以宋代江州義

の教育にはある程度の水準があったものと考えられる。しかし、上掲の引用文中にいう子弟は、舜の舌と瞽叟の開眼について、常に口にしていたとされる人物である。この舜の故事は、本来知識人等が公に口にする類のものではない通俗的内容であることからしても、その弟子の學的水準は、(少なくともその当時においては)それ程高いものではなかったであろう。これは、變文が俗文學に屬するものであることや、敦煌變文寫本が在俗生である學士郎によって書寫されたこととも通じる<sup>36</sup>。

それでは、このように流布した舜の舌による開眼故事は、同じプロットを持つ開眼故事が多数存在する中で、その後どのように位置づけられていたのだろうか。また、宋代以降であれば、同系の孝子譚が史書や俗文學等に採用されていることは既に見た通りである。史書に多数採用されている事実から考えても、それが史實に近い位置付けが広く働いていたことにもなる。これらの問題について、元末明初に生きた著名な文人である陶宗儀の文章から考えてみたい。

### 三、陶宗儀撰『輟耕録』に見る舜の舌による開眼故事

陶宗儀撰『輟耕録』卷第6「孝感」には、先に見た『江南別録』の舜の故事が、以下のようにそのまま全文引用されている。そして、そこに併せて陶宗儀の孝に對する見解も窺われる。(『江南別録』の引用箇所を太字で示す。)

越楓橋里人丁氏，母雙目失明。丁至孝，每朝盥漱訖，即舐母之目，積有年矣。俄而母左目明，未久，右目復明。憲司上其事於朝，表其閭曰孝子之門，至治年間也。**因讀『江南別録』：彭李者，世爲義門陳氏之傭，夫喪明已久。有子一人，嘗聞陳之子弟言，舜爲父瞽叟舐目而致明，乃歸效之。不旬日，父目忽然明朗。**右二事誠孝行所感。今段吉父先生母夫人劉，雙目久失明，醫弗能愈。先生中鄉舉，一目忽自見物。先生及第，一目又如之。雖夫人喜溢於中，不自知其然而然，亦先生學業有成所致與。傳曰：立身揚名，以顯於後世，孝之至也。其此之謂焉。先生諱天祐，汴梁蘭陵人，仕至江浙儒學提舉<sup>37</sup>。

これは、丁氏と舜の孝行譚を例に挙げ、陶宗儀と同時代の段吉父の孝と母親の開眼について述べたものである。なお、「傳曰」として引かれた最後の一文(「立

門陳氏、撫州義門陸氏爲例(上)』『大陸雜誌』第97卷第2期、1998年8月、33-48頁。

<sup>36</sup>小川貫弑「敦煌の學士郎について」『印度學佛教學研究』第21卷第2號、1973年、84-89頁。  
同「敦煌佛寺の學士郎」『龍谷大學論集』第400・401號、1973年、488-506頁。

<sup>37</sup>陶宗儀撰『南村輟耕録』(歷代史料筆記叢刊)、中華書局、1997年、83-84頁。

身揚名，以顯於後世，孝之至也。』)は、『孝經』の「立身行道，揚名於後世，以顯父母，孝之終也。」を踏まえたものであろう。

さて、ここで考えるべき問題は2つある。陶宗儀は何故、數ある孝子譚の中でも舜の故事に着目したのか。またそれと関連して、多數ある舜の孝行譚の中でも、何故彼は『江南別録』中の故事を選んだのか。單に舜の逸話を引くことが目的であったならば、經書や史書等、もっと權威のある相應しい典籍があったはずである。このことから考えるに、陶宗儀は何らかの具體的な意圖があったために、この『江南別録』の舜に関する文章を引用したのであろう。それではその目的とは果たして何であったのか。前後の故事との繋がりを考えると、次のことが分かってくる。

まず、1つ目に挙げられた丁氏の故事は、至治年間(1321-1323)のこととされる。それは、陶宗儀の生まれる數年前に起こった開眼故事である。また、その舞臺となった地域は、越の楓橋地域である。これもまた、陶宗儀の生まれである浙江と近い位置關係にある。このことから考えるに、“孝子之門”と稱された丁氏の話は、陶宗儀がかなり親しみをもって耳にしたところであったのだろう。

では、それに續いて引用された『江南別録』の舜の故事はどうであろうか。先に見たように、10世紀においては既に舜の舌による瞽叟開眼の故事が中國の廣い地域に流布していた。ところがその一方で、舌によって開眼するという故事は、そのままでは俄かには信じ難い、一種の奇譚としての側面を有していることは否めない。『江南別録』において、舜の舌の故事のように、實際に舌によって開眼した人物(彭氏)がいたと示されていることは、陶宗儀の文章中の故事に信憑性を付加し、現實味を帯びさせることになる<sup>38</sup>。ここに、陶宗儀が『江南別録』の舜の文章を選んだ根據があったと考えられるのである。またこれらの特徴は、舜の舌による瞽叟開眼の故事が、宋代以降の史書と同じく、單なる奇譚としてだけでなく、一定の史實的な故事として後世に認識されて傳わっていたことを示している。

そして、舜が孝によって挙げられ皇帝となったことに同じく、丁氏もまた、その孝によって表されている。この記述による限り、段吉父は孝によって挙げられたわけではないのであろうが、最後に引かれた『孝經』の文章との關わりから判断すれば、陶宗儀が孝と立身との繋がりの中で段氏の故事を捉えていたことは間違いない。

それでは何故、舜の故事はこのように後代まで傳えられ、一時代の代表的知識人さえ言及するところとなり、また同系故事の代表的な位置を占めるに至ったの

<sup>38</sup>『江南別録』は、その幾つかの記事には疑問が持たれる一方、宋・司馬光が『資治通鑑』の來源資料として用いた經緯もある。

であろうか。その流布の要因と敦煌文獻との関わり、また敦煌文獻中に舜の故事が多数確認されたことの意義は、果たしていかに考えられるのか。

#### 四、敦煌文獻と舜の舌による開眼故事

まず、唐代頃までの舜の舌の故事を記す文獻は、劉向に假託された『孝子傳』、『法苑珠林』、敦煌文獻であった。重要なのは、これら現存する資料がいずれも佛教と密接な関わりを有することである。『法苑珠林』は言うまでもなく、敦煌文獻も寺院文書である。そして『孝子傳』が佛教の宣教と密接に関わることは、先にも取り上げた道端氏の言葉の通りであり、これまでの『孝子傳』研究の成果からも異論のないところであろう。

もちろん筆者は、舜の舌による開眼故事が佛教によってのみ傳承され、傳播していったというわけではない。ただ、その故事の敦煌文獻における残存状態から考えてみても、その流布に佛教の宣教との強い繋がりを認めることは可能である。先に述べたように、『法苑珠林』の流布がその撰述年代から稍遅れるものであったとしても、佛教が舜の舌の開眼故事を宣教に採用していたからこそ、寺院文書たる敦煌文獻にその記事が複数見られるのであろう。

また、敦煌文獻中に、舜の舌に関する文獻の存在が確認されたことは、もう1つの意義を有する。舜の舌の故事を記した典籍は、現存するものでは、唐代以前では『法苑珠林』であり、「舜子變文」と同時代以降でも、『江西別録』等の記事である。よって、舜の舌の故事がどのように流布していたのか、その流布の規模も、細々と伝わっていたのか、民間で根強く伝わっていたのか、それほど明瞭には掴み難い。敦煌文獻に多数の当該故事が確認されたことにより、唐代以前と宋代以降における流布が具体的に繋がりを見せたと言えるのである。それはまた、舜という傳説上の皇帝が、どのように民間に受け入れられていたのかを我々に示してくれている点で、敦煌文獻の意義は決して看過されるべきものではない。

では、このように中國に流布した舜の孝子譚は、海を渡った日本ではどのように伝わっていたのか。實は、日本におけるその流布は、中國と些か様相を異にしていたようである。次にこの点について見てみたい。

## 五、日本残存資料中の舜による瞽叟開眼故事と X 本『孝子傳』の想定

ここでは先行研究をもとに、日本に傳わる諸本のうち、舜による瞽叟開眼故事の記述を見いくこととする<sup>39</sup>。だがその前に、敦煌文獻における瞽叟開眼の方法をまとめておくと、以下のようになる。

S.389V「孝子傳（擬）」

與（以）舌舐其眼，眼得再明。

S.3536V

以舌舐其眼，眼得再明。

P.2621「事森」

以手拭其父淚，兩目重開（開）

P.2721V「舜子至孝變文」

拭其父淚，與（以）舐（舐）之，兩目即明。

羽 39V「舜子變」

以舌舐眼，眼得再明。

かつて王三慶氏が明らかにしたように、孝子譚を残す敦煌文獻は2つに分類される<sup>40</sup>。氏の言葉を借りるならば、「通俗類書系統」と「變文系」である。そして、上掲寫本のうち、P.2621は前者に屬し、S.389VとS.3536は後者に屬する。この王氏の見解は、近年の「舜子變文」研究でも踏襲されており、玄幸子氏は羽39Vが後者に屬するものであることを指摘している<sup>41</sup>。

そしてこの分類を基礎に基づくと、上掲5點の寫本における開眼方法は、3分類できる。手で涙を拭うP.2621と、舌で眼を舐めるS.389V、P.3536、羽39Vである。P.2721Vは、手で拭い、且つ舌で舐めて開眼させるものであるため、兩記述を取り込んだものと言える。ただ、この場合の開眼は舌によってなされたと見做

<sup>39</sup>日本の舜の傳承については以下の論著を参照した。増田欣「虞舜至孝説話の傳承——太平記を中心に」『中世文藝』第22號、1961年、1-17頁。徳田進「舜の孝子説話の發展と擴大」『高崎經濟大學論集』第10巻1・2・3合併號、1967年、17-33頁。佐藤義寛『三教指歸注集の研究』、大谷大學出版、1992年、162頁。馬淵和夫他校注『三寶繪・注好選』（新日本古典文學大系31）、岩波書店、1997年、247、403頁。黒田彰『孝子傳の研究』「III 孝子傳と二十四孝」「二・重華外傳——注好選と孝子傳」、思文閣出版、2001年、350-379頁。幼學の會編『孝子傳注解』、汲古書院、2003年、24-38、285-286、344-345頁。村山修一編『普通唱導集：翻刻・解説』、法藏館、2006年、174頁。

<sup>40</sup>王三慶氏は『敦煌變文集』（人民文學出版社、1957年）に收められた『孝子傳』について、P.2621、S.5776、S.389、P.3536、P.3680のうち、前二者を「通俗類書系統」とし、後三者を「變文系」として2系統に分類している。王三慶「《敦煌變文集》中的〈孝子傳〉新探」『敦煌學』第14輯、1989年、189-220頁。

<sup>41</sup>玄幸子「羽039Vを中心とした變文資料の再検討」『敦煌寫本研究年報』第5號、2011年、81-94頁。



し得ることから、いずれかに分類するとすれば、後者に属することになる。

さて、このような敦煌文献の記述の傾向から見ると、手で拭って瞽叟を開眼させる用例は決して主流ではなかったことが分かる。これは先の高橋氏の研究を引用した際にも述べたことであるが、ここで日本残存資料における舜の故事を見てみると、瞽叟開眼の方法がいずれも舌ではなく、中国での傳承と大きく異なっていることに気が付く。まず、舜の資料としても主要文献と目される2点の日本残存『孝子傳』を取り上げよう。

父曰：「君是何人，而見給鄙？ 將非我子重化耶？」舜曰：「是也。」即來父前，相抱號泣。舜**以衣拭父兩眼，即開明**。（陽明文庫本『孝子傳』）  
父奇而所引後妻，來至舜所問曰：「君降恩再三，未知有故舊耶？」舜答云：「是子舜也。」時父伏地，流涕如雨，高聲悔叫，且奇且恥。爰舜**以袖拭父涕，而兩目即開明也**。（船橋本『孝子傳』）

陽明文庫本『孝子傳』は、書寫年代は不明であるが、中世の寫本と見られており、船橋本『孝子傳』は“天正八年”（1580年）の識語を有している。ただその内容は、いずれも中国で散逸した内容を備えており、前者は隋代までは下らない可能性が高いこと、後者は概ね唐代のものと考えられている。それぞれ衣と袖による開眼である。そして、これら『孝子傳』以外の典籍では、以下のようになっている。

父曰：「君是何人，見給墻（鄙）？ 時非我子重花乎？」「舜是也。」即來父前，相抱號泣。舜**以衣拭兩眼，即開明**。（『普通唱導集』）  
舜**將衣襟拭父目，即開朗明**。（『古注千字文』）  
舜見父年老泣，攬子泣。即舜**以手拭父淚，兩目明**。（『注好選』）  
父識其聲曰：「此正似吾子重花聲。」舜曰：「是也。」即前攬父頭，失聲悲號，**以手拭父眼，兩目即開**。（大谷大學圖書館所藏本『三教指歸注集』）

これらの典籍うち、『普通唱導集』は陽明文庫本『孝子傳』の流れを汲む。『注好選』は船橋本『孝子傳』の流れに近いものの、船橋本以上に敦煌本の舜の故事に近いとされる<sup>42</sup>。

さて、以上の瞽叟の開眼方法をまとめると、陽明文庫本『孝子傳』と『普通唱導集』は衣で眼を拭うとし、船橋本『孝子傳』は袖で拭うとし、『古注千字文』では衣の袖で眼を拭うとし、『注好選』では手で涙拭うとし、大谷大學圖書館所藏『三教指歸注集』は手で拭うとする。ここには眼を拭うのか、それとも涙を拭うのか、と

<sup>42</sup>注 39 増田論文参照。

いう拭う対象の相違もあり、それぞれに傳承の問題があろうが、いずれも拭うという行爲によっていること、並びに舌による開眼でない點では一致している。これは、舌の開眼を主流とする中國の傳承と大きく異なるものである。このことは、日本における舜の孝子譚の傳承を考える際にも重要となってくる。

かつて日本の『孝子傳』研究は、概ね陽明文庫本と船橋本とを中心に据え、そこから後世の傳播が考えられてきた。しかし近年では、兩『孝子傳』以外にも、日本に受容され、廣く流布した別系統の『孝子傳』の存在が指摘され始めている。例えばその1つが、『注好選』の舜の故事である。『注好選』の内容は、日本の兩『孝子傳』以上に敦煌本の内容に近く、その點に着目した結果、日本には敦煌本に近い『孝子傳』が傳來していたことも窺われるのである<sup>43</sup>。このような近年の成果を踏まえて考えるならば、舜による瞽叟の開眼方法を手や衣、袖などで拭うとする『孝子傳』が日本に傳來し、一定の流布を見せたとも考えられるのではないか。今假にこれをX本と呼ぶならば、このX本は、陽明文庫本や船橋本の『孝子傳』が拭うとするのと相俟って、日本における舜の故事の流布に大きな影響を與えたのであり、それが、日本では中國と異なる舜の孝子譚が流布した一要因となったのであろう。

ところで、もう1點ここで考慮すべきは、これらの日本の典籍の中にも、『普通唱導集』など、佛教關係のものが多く確認されることである。恐らくこの背景には、たとえ開眼の方法が異なろうとも、六朝時代の『孝子傳』から『法苑珠林』へ、そして9、10世紀の敦煌文獻に至るまで、舜の當該故事の傳承に佛教の宣教が大きく関わりを有していたという、中國における流布のあり方が強く反映されたためであろう。

## 結語

以上、本論では、敦煌文獻中に確認された舜の舌による瞽叟開眼故事の流布の様相を見てきた。中國の傳説的な皇帝として長く稱えられてきた舜については、その文獻上の記録は決して多くの典籍に確認されるものではない。そのような中であって、中國社會において、いかに舜の孝子譚が傳播していたのかを垣間見ることができたのは、敦煌文獻中の舜の故事が多數確認されたことに多く負うものであり、舜の人物像の形成を窺う點だけでなく、中國と孝の倫理の繋がりを窺う點でも重要であろう。また、その故事の日本における流布が異なる開眼方法となっていたことも、かつての日本に傳來したであろう新たな『孝子傳』の存在を窺わ

---

<sup>43</sup>注 39 黒田論著参照。

せるものとして貴重であることは、今後の『孝子傳』研究にも意義を有すると言えるのではないだろうか。

今後の課題としては、何故舌と開眼が結びつくようになったかの解明が挙げられる。六朝時代、並びにそれ以前において両者が結びつくようになった背景には、舌と開眼にどのような意味が込められていたのか。またそれらはいかなる意味を有して舜の故事へと取り込まれていったのか。この点については民俗學的な考察をも要するであろうが、そのようにして当該故事の成立した背景が解明されるならば、その流布や當時の人々の認識についてもまた新たな理解が得られるであろう。

(作者は広島大學綜合科學研究科博士課程・日本學術振興會特別研究員 DC)